● テーマ ●

中国文化への誘い
――漢字からのアプローチ――

An Invitation to Chinese Culture:
The Perspective from Chinese Characters

2012 年 9 月 11 日（火）

● 発表者 ●

金　哲会
JIN Zhehui
北京語言大学　教授
国際日本文化研究センター　外国人研究員
Professor, Beijing Language and Culture University
Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

発表者紹介

金　哲会

JIN Zhehui

北京語言大学　教授

国際日本文化研究センター　外国人研究員

Professor, Beijing Language and Culture University

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

略　　歴

1994 年 3 月	北海道大学文学研究科　修士
1998 年 1 月	延辺大学人文学院日語系　副教授（系副主任兼教研室主任）
2004 年 1 月	延辺大学外国語学院　教授
2003 年 5 月	延辺大学国際交流合作処　副処長
2006 年 9 月	嘉興学院外国語学院　院長
2007 年 11 月	浙江省第十一回人民代表大会　代表
2009 年 7 月	北京語言大学出国部日語教研室　教授
2012 年 4 月	国際日本文化研究センター　外国人研究員

著書・論文等

「三島由紀夫論――遠景の消失、太陽の季節」（『日本学研究』9、北京日本学研究センター、2000 年 12 月）

『三島由紀夫研究』（延辺大学出版社、2001 年 6 月）

「エロティシズムのバリエーション――三島由紀夫の天皇論と文化論の行方」（『日本学研究』10、北京日本学研究センター、2002 年 3 月）

『日本学論叢』（共編著、延辺大学出版社、2003 年 12 月）

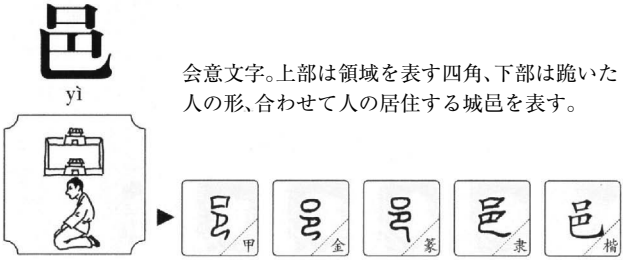
『日本語総合教程第五・六冊課文翻訳と解答』（共編著、上海外語出版社、2008 年 10 月）

「「城市」と「食産」――中国の都市文化」（『都市歴史博覧』笠間書院、2011 年 12 月）

中国文化への誘い
――漢字からのアプローチ――

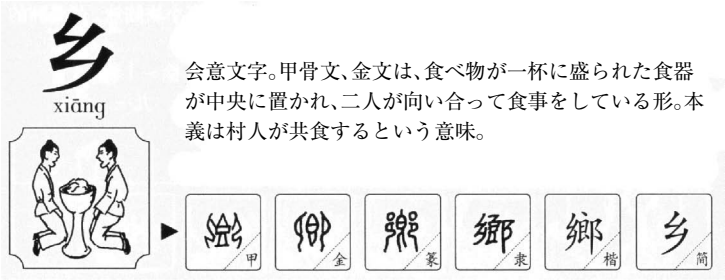
第一章　「封建」の時代背景と「城市」の成り立ち

中国語では、日本語の「都市」のことを「城市」と呼んでいるので、ここでは中国語のまま「城市」文化という表現を使うことにします。というのは、むしろその方が中国の都市文化を起源にまで遡って捉え直し、そのあり方を歴史的に論ずるのにはるかに都合がよいからです。上古時代（商周秦漢）においては、ほとんどすべての町が幾重もの城壁と城門を持っており、城壁と城門のない町は「城」（しろ、町の意）と呼ぶことができませんでした。また、当時、いわゆる「国」の規模はきわめて小さく、[1] 一つかいくつかの村からなる場合がほとんどだったので、「城（じょう）」または「城市」は、人間社会の三つのコミュニティー、つまり「国」「城市」「村落」の一つにほかならず、いずれも「邑」と呼んでもいいでしょう。この「邑」の字は、上部の「口」が囲いあるいは範囲を、下の部分は人が跪いている形を表す会意文字です。説によっては、部首の「口」は人の口を意味するといわれていま



図解漢字図1
『漢字図解字典』(顧建平著、中国出版集団東方出版中心、2008年10月)より、以下同。

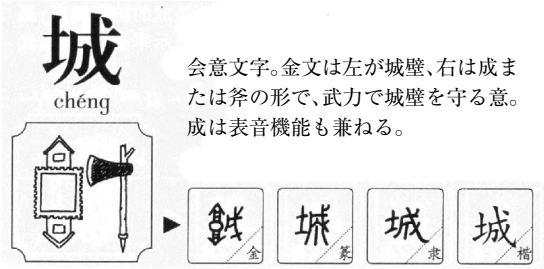
す。いずれの場合も一種のコミュニティーを意味することは間違いありません。上古時代の中国には、ほかにも「邦」や「都」や「郷」や「郊」や「鄙」など、さまざまなコミュニティーがありますが、この五つの漢字の部首はいずれの場合もおおざとです。[2] このことから、コミュニティーの一種であることはわかるのですが、このうち一番古いのは「郷村」(村落)です。[3] この郷里の「郷」の字はもともと「共餐」「共食」を意味し、「饗宴」の「饗」(飧)の字(中国繁体字の「饗」は日本の場合と少し異なる)と同じであったと思われます。その金文、または甲骨文の字形は、中央に食べ物を入れておく簋(き)(飯櫃、おはち)が置かれ、両側の人がそれぞれお櫃に向かって跪いている姿を表しています。つまり二人が向かい合ってすわり、同じお櫃の飯を食するという意味の文字でした。上古時代の中国では、このような共食の機会を持ったのは、同居人か、家族または同じ氏族の人でした。しかし、後で



図解漢字図2

詳しく述べますが、次第に階級に分かれ、共食する家族・親族の数が増えたことから、王侯貴族たちは自らの「子民」（子どもと人民）と同じ飯櫃（めしびつ）を囲むことをやめました。彼らは、肥沃で地相のいい土地を求め新たな住居を定め、これを高い城壁で囲みました。それが「城」のそもそもの始まりです。つまり「城」は、起源を探れば、古代王朝の国都であり、「諸侯」の「封地」（封土）、「大夫」の「采邑」（采地、食邑）でもありました。城を中心に、その外にあるのが「郊」と「野」で、さらに遠いところにあるのが「鄙」つまり「郷村」のコミュニティーでした。城壁をはさんで尊卑が分かれ、城門一つで貴賤が判然としたというのが伝統的な意味における「城」であったわけです。

ところで、「諸侯」「封地」「大夫」「采邑」という言葉は、「封建」制度およびその時代背景と深い関係がありますので、その概念説明も兼ねて、中国文明の歴史の流れを振り返ってみたいと思います。おおまかに中国の文明史には三つの画期的

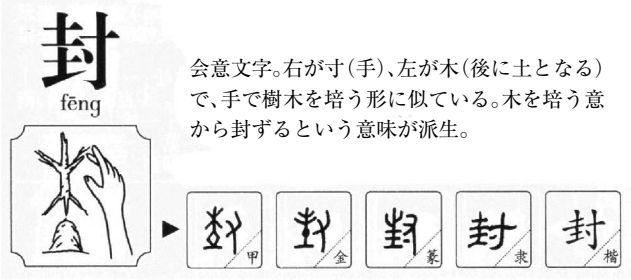


図解漢字図3

な出来事があったといえましょう。第一は「西周封建」（紀元前一〇四六～紀元前二五六）、第二は秦（始皇帝）の天下統一（紀元前二二一～紀元前二〇六）、第三は辛亥革命（一九一一）であります。「西周封建」以前は、氏族・部落・部落連盟・部落国家・部落国家連盟の時代、周代は国家連盟の時代、そして秦以降は統一国家の流れがずっと続くので、この三つの流れを示すと次のようになります。

西周封建～秦の天下統一：邦国時代
秦の天下統一～辛亥革命：帝国時代
辛亥革命～現在：共和国時代

国のあり方から見れば、邦国時代は封建制で、帝国時代は郡県制ということになります。そこで、封建制と郡県制の違いを見てみましょう。まず「封建」の「封」は「封土」の意味で、国境を画定することが重要でした。具体的には、国境



図解漢字図4

地帯に深い溝を掘り、溝から掘り出した土を両側に固めてそこに木を植えました。また「建」とは、国境の画定された地域を治める「君王」（国王）を定めて国を造る（建国）ことなので、「封建」の語は、すなわち「封土建国」という意味になります。さらにこの「封土建国」は、西周初年頃の大陸の人々の世界観とも関連しています。この時代の人たちは、「天圓地方」という語に示されるように、頭上の空のことを天と呼び、天は丸いもの、足もとの地上は四角いものと考えていました。そして、地上には東西南北中という五つの方角があり、その真ん中を「天下之中」として中国と呼び、さらにその真ん中の国に住んでいる民族を「華夏民族」と呼びました。地球の裏側に別の民族が住むとは考えなかったので、「天下」は全世界を意味しました。「華夏民族」が真ん中の国に住む理由は、天が一番愛する民族であるからという、いとも単純なものでした。また彼らは、天は造物主であり、すべての生命は天によって育まれるものだと思っていました。そして、

天はその下（天下）の管理を自らの嫡子である天子一人に任せる、という王権天授説が唱えられました。上古時代の中国の婚姻制度は、一夫一妻多妾制で、基本的には正妻の長男が天子になる場合が多かったのです。しかし、天下の管理を一人で行うわけにはいかず、叔父や弟に分割して統治させました。その単位が「国」と呼ばれ、それぞれの国の管理を任された元首が、すなわち「国君」または「諸侯」でした。そして「諸侯」も、天子から分け与えられた「国」に国境を画定して「封建」するのですが、「諸侯」も、この国を独占するわけにはいかないので、さらに分割してその叔父や弟に「国」の一部を分け与えました。彼らは「大夫」と呼ばれ、「大夫」に分け与えられた土地がすなわち「家」です。天子、諸侯、大夫はいずれも世襲制なので、彼らの地位は継承されますが、嫡子ではない庶子（妾腹の子）が父親の地位を引き継ぐのは難しく、天子の庶子は諸侯に、諸侯の庶子は大夫に、大夫の庶子は「士」となります。「士」は、他の貴族（天子、諸侯、大夫）と異なり、地位はあっても土地は持っていませんでした。さらに「士」以下は庶民ということになります。しかし数千年に及ぶ封建の歴史においては、さまざまなバリエーションが考えられます。特に天子と諸侯は絶大な権力を持っており、数えきれないほど多くの子孫を残したものと思われます。[4]「邦国」時代の中国では、「国」と「家」は明らかに別物でした。秦の始皇帝の天下統一によって、初めて「国」と「家」が一つとなり、統一国家が成立し

ました。これにより、一つの天下に、林立する諸国が独立主権を有して、ともに天子に仕えるようになった、といえます。[5] 天下イコール国家となったことを受け、それまでの諸侯が治める「国」と大夫が治める「家」は、それぞれ郡と県と呼ばれるようになり、郡県制が成立しました。政治機構は、中央政府・郡・県からなる帝国制となり、一つの天下に一つの国家しかなく、中央集権で段階的に管理を行う点に特徴があります。この制度は、皇帝を唯一の国家元首とする帝国制で、中国の歴史において、秦以降、原則として一つの国家しか存在を認められなかったのです。

次に政治形態の面から見ると、邦国制は貴族政治で、帝国制は官僚政治と見なすことができます。邦国時代の天子・諸侯・大夫・士はいずれも貴族階級に属します。特に天子・諸侯・大夫は、世襲によって子子孫孫がその特権を行使しました。もっとも貴族の貴族らしさは、その世襲制にあり、貴族政治の特徴は自らのための政治という点にあります。天下は天子のものであるから天子が管理し、国は諸侯のものであるから諸侯が管理し、家は大夫のものであるから大夫が管理することになります。そして士は、領地も不動産も持たないので、自分で自身を管理せねばならず、自らの修身に努めました。そして、その後は、大夫を助けて「家」を整え、諸侯を助けて「国」を治め、天子を助けて「天下」を統一に導くのが役目で、これは「修身斉家治国平天下」という言葉に示されています。要するに、

邦国制が貴族的でセルフサービス（自助）のための政治であったのに対して、帝国制の郡・県の長官は、世襲ではなく中央政府に任命されたので、皇帝の職業代理人とでもいうべき官僚でした。

封建政治の所産ともいうべき「城」は、起源的には古代王朝の国都であり、「諸侯」の「封地」（封土）、あるいは大夫の「采邑」（采地、食邑）の中心地でした。しかし封建時代には、尊卑・貴賤・遠近・親疎などのレベルが異なるため、厳密にいえば、これらを単純に並列することはできないでしょう。[6]

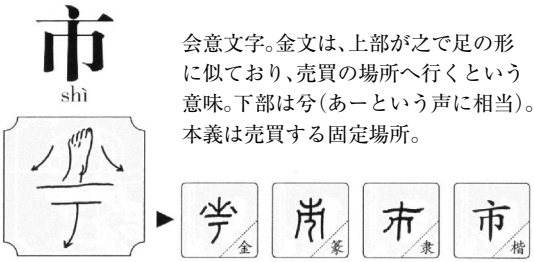
「市」は「城」と「郷」の間に存在するコミュニティーで、『説文解字』（後漢の許慎著）に「市、買売之所也」（市とは、売買の場所なり）とあるように、人々が集まって売買・交易（交換）を行うところです。

ただ一説には、金文の字形は上部が「之」（行く）、下部が「兮」（騒がしい声）で、「騒がしい（声のする）ところへ行く」という意味の会意文字だったといわれます。[7]

城邑の中に住む王侯貴族たちは定期的に献上される貢物だけでは物足りず、旬の食品を望むこともありました。また身分の低い臣民たちにも、一度は城邑の様子を見てみたいという単純な好奇心や、できれば日銭でも稼ぎたいという欲求もあったでしょう。そうした思惑から生まれたのが最初の「市」だったのでしょう。[8] やがて売買取引が頻繁になるにつ

れ、定期市が成立しました。商人たちが定住するようになり、そこに独自のコミュニティーが、形成されるようになりました。

上古時代の中国では、「城」の周りに巡らす城壁のことを「牆（しょう）」と称し、「市」の周りに巡らす壁を「垣」と呼びました。『説文解字』に「卑曰垣、高曰墻（牆）」（低きを垣と呼び、高きを牆と呼ぶ）とあるように、城邑の周りを取り囲むのが高い城壁で、中に住んでいるのは王侯貴族、そして「市」の周りを取り囲むのが低い垣で、中に住むのは身分の卑しい商人という具合に、両者の落差は甚だしかったのです。それらは「城」の足元にひれ伏した形でしか、その存在が認められませんでした。しかし「市」の「城」への進出は、歴史的に見て非常に画期的です。「市」が「城」と一体化し、「城市化」＝都市化することで、歴史の進歩や文明の発展に多大な貢献を果たしました。中国語では、「通り、街路」のことを「通道」（通路）と区別して「街道」「街市」と称し、日本語の「市街」の意味で用います。大通りは、人や車の通行に便宜を図ったのみならず、両側の景色も十分眺



図解漢字図5

めることができ、商店街の両側の店舗がお客に開かれていた（城のような密閉空間ではない）ことから、ここに市民社会のイメージと民主主義のきざしを読み取ることも可能ではないでしょうか。

第二章　「民以食為天」――「食」に生まれた中国（「食産」）文化

「食べる」ということが、中国文化の発展に与えた影響は測り知れません。中国文化は、食べるところから生まれた文化、あるいは食べて生まれた「食産」文化ではないか、というのが私の持論です。「民以食為天」（『漢書・酈食其伝』）という表現は、「民は食を以て天と為す」、つまり食事をすることが何よりも大事であることを意味します。タイトルに使った「食産」という言葉は私の勝手な造語ですが、次にその概念範疇について述べたいと思います。

（一）台所内閣と食器政治

封建時代の中国で、天子を補佐して政治を行った行政のトップを、宰相または丞相といいます。この「宰」の本来の意味は、神や聖霊に捧げる生き物（犠牲）を潰し、胙肉（そにく）（ひ

「婦好爵」
殷の時代晩期のもの、高さ26.3センチ、
1976年、河南省安陽小屯5号墓から出土、
中国社会科学院考古研究所所蔵。

もろぎ：神に供え、祭りの後に臣下に配る肉）を切って祭りの参加者に分け与える人を指します。また「相」は、式典や儀式の進行を司る司会者、あるいは客をもてなして一緒に飲み食いをすることを指します。つまり宰相とは、台所の料理人と相伴役とが一緒になってできた言葉です。ただ実際に、料理人が作るのは祭祀の供物であり、相伴する相手は王侯貴族のような高級官僚ばかりなので、宰相の権力には絶大なものがあったと思われます。そして『史記』に「国之大事、惟祀与戎」（国家の大事は祭祀と戦争に尽きる）とあるように、封建社会において祭祀はまさに天下の一大事でした。

ところで、内閣に台所を置き料理人を宰相に任命することは、いかにも中国的特色ですが、考えてみればそれほど不思議な話ではありません。なぜなら、「君以国為家、則家務即是国務」とよくいわれるように、「国王は国を以て家とするから、家事が国務となる」のは当然のことです。また、「民以食為天、則治民即是治肴」のごとく、民は食を以て天とするから、国民の管理は食べ物を管理することに尽きます。つまり国を治めることは食べ物を分配することなのです。

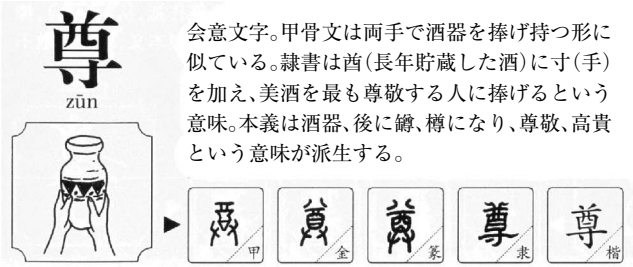
爵
jué

象形文字。甲骨文の形は古代の酒器の一種に似ている。金文は点を二つ加え酒の香りがあふれ出るという意味。小篆は下が鬯で、又（手）を添え爵で酒を注ぐという意味。本義は酒器。

図解漢字図6

食べ物の分配に関しては、漢王朝[9]の開祖、劉邦の宰相で陳平という人物が有名です。彼は少年時代に、故郷で一度だけ祭祀に供えた胙肉を分配する「宰」を務めたことがありました。祭りの式典の後、神の食べ残した胙肉、つまり神からの賜物である肉を、年少ながらみごと均等に分けた（「分肉食甚均」）ことで、周りの大人から絶賛されました。陳平は、「そうですか。もし私を天下の宰に任命してくださったら、わが国もこの肉と同じようになります」と答えたといい、実際に漢王朝の高名な宰相となりました。

中国の歴史書に記された各時代末期の農民蜂起は、そのほとんどが食料の窮乏から起きたもので、特段の大義名分によるものではありません。いつの時代も、食べ物を均等に分配することが、最も重要でした。そして食べ物の分配には、数量の多寡、品質の優劣、食べる時間の順番など、三つの基本的な原則があります。すなわち、地位が高いほどたくさん食べ、かつ上質のものを食べ、早く食べることが



図解漢字図7

できます。そして、当然ながら地位の低い場合はその逆となります。[10] 食べ物の分配は、「席位」（席の順位・席順）にしたがってなされ、上古時代の中国でも日本でも、席位がそのまま地位となり、これが厳格に守られました。一番重要な人物の席位が中央に置かれ、主席（主人または主賓の席）と呼ばれました。他は等級の順に主席の両側に分列して座ったので、列席と呼ばれました。このルールは非常に細かく規定され、それを「礼」と呼んでいました。

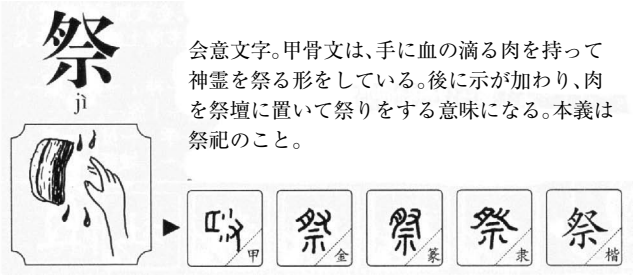
孔子は「俎豆之事」（礼儀作法）をマスターしているといいましたが、これらはいずれも食べることから生まれた文化です。また席位のほか「酒具」も身分と地位のシンボルであり、「爵位」という言葉も、もともとは「杯」すなわち「爵」と、地位の「位」の字が組み合わさってできた言葉でした。酒具には主に「樽＝尊」と「爵」があり、樽は酒を入れておく容器で、酒罐を指し、爵は酒杯を意味しました。上古時代の中国では、パーティの時、樽を地位の一番高い人の席の前に置

（左）「雲紋高足玉杯」
1976年、「阿房宮」遺跡から出土。高さ14.5センチ。西安市文物管理委員会所蔵。秦の皇室用品、国家一級文物。

（中）「四羊方尊」
殷の時代のもの。高さ58.3センチ、重さ約34.5キロ。中国国家博物館所蔵。国家一級文物。

（右）「司母戊大方鼎」
殷の時代後期の王様祖庚、祖甲が母のために造ったもの。中国で最大かつ一番重い青銅器。中国国家博物館所蔵。国家一級文物。

いたと思われ、まさに酒樽から尊者・尊敬・尊卑など、「尊い」とか「高く敬う」とか「貴重」「高徳」などの意味が派生したのです。酒杯の爵も一人一つずつ手前に置いておくのですが、爵には質の良し悪しがあり、身分の貴賤によって使い分けられました。たとえば、公（太政大臣、左大臣、右大臣）と卿（大納言、中納言、参議、中国語でいうところの三公九卿）には玉爵、大夫には瑶爵、士とその他の低級官吏は散爵を使っていたものと思われます。そしてパーティには当然ながら肉がなければいけません。肉は鼎（現在の鍋、釜）[11]で煮るのですが、場合によっては羊や牛を、まるごと中に入れて煮たといいます。

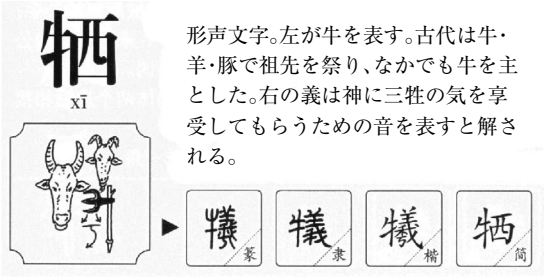


図解漢字図8

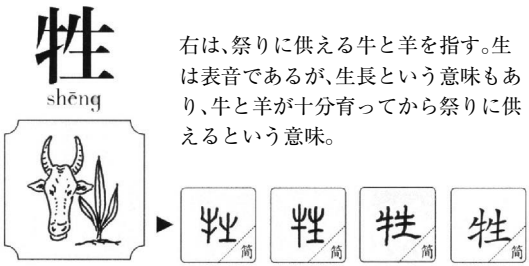
鼎は青銅の釜で、円形三足で両耳を持つものが多く、方形四足のものもあります。中国最古の王朝といわれる夏の時代から千数百年間、鼎はずっと国の宝物とされており、鼎の掌握は食べ物の分配権の掌握を意味し、国家権力の支配を象徴していたのです。[12]

（二）シャーマニズム（狩猟巫術）の起源

鼎は権力と神器、政治と宗教という二重の意味を持ちますが、もっとも多く使われるのは祭祀の時でした。祭祀とは、招いた客をご馳走でもてなすことですが、その相手が天神地祇あるいは故人である点に重要な意味があります。祭祀の「祭」は、上部が「片手に肉を持っている」状態を表し、下部に「示」の字があるので、手に肉を持って神に見せることが原義と考えられます。つまり、天神地祇や祖先に、世界で一番おいしい肉を捧げるかわりに自分たちの願いを聞いてほしい、と祈願するのが祭りでした。祭りには酒と肉が不可欠



図解漢字図9



図解漢字図10

で、神に酒を捧げるのは、神も酒の香りと同じく目に見えない縹渺とした存在であり、神と酒の香りが似た者同士でコミュニケーションが取りやすいという理由によるものでしょう。先ほども申しましたが、神・精霊などに供える生き物のことを、犠牲または生贄といいます。「犠」は色が純粋であるもの、「牲」は体が揃っているものを意味します。犠牲となったのは、主に馬・牛・羊・豚・犬・鶏の六種類で、これを中国では「六牲」と呼びます。このうち、馬を除いたものを「五牲」、さらに犬と鶏を除いたものを「三牲」、または「太牢」と称していました。なか

羔
gāo

会意文字。上部は羊、下部は火で、火で羊を焼くという意味。一番おいしい羊の焼肉は子羊だということで、子羊の意味となる。

図解漢字図11

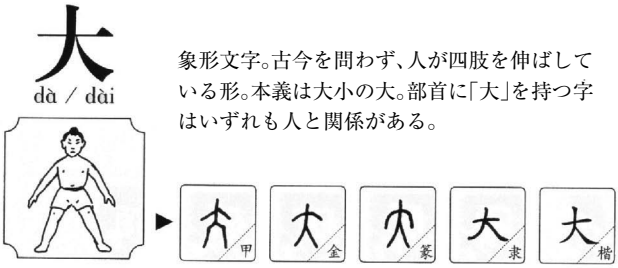
でも牧畜文化圏では、羊を最も重用しています。ユダヤ教でもキリスト教およびイスラム教でも、「身代わりの子羊」の物語はよく知られています。現在の中国でも日常言語として、「替罪羊」（身代わりの羊）という言葉がよく使われます。中国語には羊の字の入る文字がきわめて多いのですが、紙幅の関係で一つだけ例を挙げます。羊の丸焼きを意味する「羔」という字があります。この文字は、「羔」（子羊）、「美」（美しい）、「炙」（火の上に乗せた肉）などと解釈できますが、「小羊味美、为炙尤宜」（子羊は美味で、焼肉にするともっとよい）という点では、いずれの解釈でも大差はないでしょう。羊は肉を食用とするばかりでなく、その皮も衣服として利用できるので、非常に貴重な動物でした。ちなみに着物の「着」は、「羊」と「目」の字が組み合わさってできた文字で、「見る羊、または見られる羊」と解釈できます。着ると暖かく、かつ下に皮を敷いて寝られるので、人々の衣食住にとって欠かせないものでした。また、羊は群れをなしてゆっ

図解漢字図12

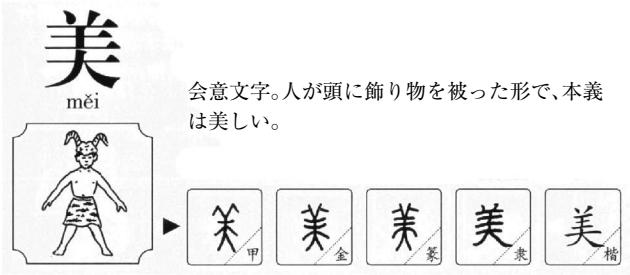
くり移動し、生存競争が激しくないので飼いやすく、しかも体が大きいので、人間にとっては格好の動物で、まさに神からの賜物そのものといえるでしょう。だからわれわれの祖先は、吉祥（さいわい）を表すものとして、羊に賛美の言葉を惜しみませんでした。その証拠に羊と関係する字を挙げておくと、『説文解字』に「羊言为善、羊人为美、羊我为義、示羊为祥」とあるように、「羊」と「言」の字が組み合わさったのが「善」で、「羊」と「人」で「美」、「羊」と「我」で「義」、「羊」と「示」で「祥」となります。『説文解字』の解釈では、「吉祥」と書く場合、もともとは「祥」のかわりに「羊」の字をそのまま書いていたといいます。

ところで、羊が吉祥（さいわい）なのは、それがおいしい肉だからですが、食べるにはまず羊を捕まえる必要があります。羊は群れをなし、集団で移動する習性を持っているので、羊になりすまして彼らを誘導すれば、容易にかつ大量に捕獲することができます。そこで、われわれの祖先は、頭に角の生えた羊頭をかぶり、羊皮を纏って羊の群れに入り、彼らを騙すテクニックを身に付けたのです。

現代中国語では偽装のことを「佯装」、すなわち「羊になりすます」といったり、仮装して攻撃することを「佯攻」と称したりします。[13] また、羊になりすまし、群れに混じった猟人（猟師）が最初の「羊人」でした。つまり「羊人」とは本来「佯装（羊になりすます）」のことであり、狩猟技術の一種でした。場合によっては狩猟技術が失敗に終わり、偽装の羊頭、羊皮と本当の羊の関係に戸惑いを感じたりすることもあったであろうが、しかし羊がたくさん取れ、肉がたくさん食べられるのは、やはり角の生えた羊頭をかぶり、身に羊皮を纏って羊になりすまし、その群れに混入することができたからであるとしみじみ感ずるようになったのではないでしょうか。そこで「羊になりすます」（佯装）ことと「羊を装う」（装羊）ことを固定し、定式化することで規範を創り、新たにシンボリックな内容を加えて「式典」や「儀式」が出来上がったと考えられます。このようにして「狩猟技術」から「狩猟巫術（シャーマニズム）」が生まれ、「羊になりすます」・「羊を装う」ことが呪師（シャーマン）と祭司の職業（特権）になったと思われます。原始宗教においては、シャーマンと祭司は、偽装の羊頭を被り、羊皮を身に纏って、神により多くの羊肉を賜るよう祈りました。このシャーマンと祭司になれるのは「大人（たいじん）」だけでした。ところで、大人の「大」は、立っている人を正面から捉えた象形文字であり、それを側面から捉えた人偏の「亻」とは異なります。このため「羊人」たるシャーマンは、「佯」ではなく「美」と書くようになったのでしょ



図解漢字図13



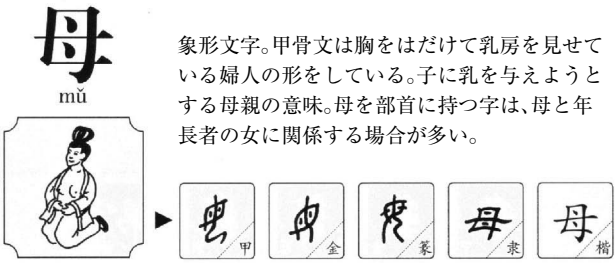
図解漢字図14

う。これはシャーマン自身が美しいからというわけではなく、羊肉を「多」[14]く食べさせてくれる人だからです。羊肉を与えてくれる「羊人」は人々の目に美しく映ったのでしょうが、本人からすれば、その偽装は単なる「儀式」にすぎませんでした。また「儀式」の「儀」は、本来人偏のない「義」なので、シャーマンにとっては、儀式イコール義務となったものと思われます。偽装したシャーマンと祭司は、脱魂・憑依のような特異な心理状態で、神霊・祖霊と直に接触・交渉しました。彼らは、卜占・予言・治病などを行う仲介者であり、

神の代言者でもあったわけです。神からの予言は、万人にとってめでたいものでなければならず、神の告辞は「吉言」、つまり「羊言＝善」だったのです。

（三）偉大なる母の偉大さ――血縁よりも「食縁」

中国語には、「乳のある人がすなわち母である（有奶便是娘）」という言い回しがあります。聞こえはあまりよくありませんが、上古時代の中国人にとって偉大なるもの、神聖なるものは食であり、それを与えてくれる人に報いなければならないとされてきました。中国人（漢族）の文化には、食べ物は生命の源で、食べ物を与えるものは生命を与えるものであるという観念があります。人間は生まれてから一人前になるまで、母親からまず乳を、一、二年後にはご飯を与えられます。子を育てる母親は一番親しく、偉大で、最も聖なる人です。なぜなら、生まれた時に自分が誰の子で、誰と血縁関係を持っているのかわかるはずがなく[15]、「生育」の「生」よりも「育」（養い育てること）を大切に思うからです。その一方で、中国人は血縁関係を非常に大事にしており、血縁こそ一番頼りになるという意味で、よく「血は水より濃い（血濃於水）」という表現を使います[16]。最も深い血縁関係は「母子」で、たとえば嫁に行った人が自分の家に帰ることを「母の家に帰る（回娘家）」といい、「父の家に帰る（回爹家）」とは絶対にいいません。また、夫の家のことも「姑の家（婆家ある



図解漢字図15

いは婆婆家）」とはいいますが、「舅の家（公家）」ということはありません。もちろん「養ひて教へざるは父の過なり、教へ厳しからずは師の惰なり（養不教、父之过。教不严、師之惰）」という表現もありますが、実際家庭のしつけが悪い場合は、「母のしつけのないやつ（没娘養的）」と罵詈雑言を浴びせられます。母の次に親しいのは兄弟で、よく手と足の関係にたとえられます。「手足の情け深し（手足情深）」とか「情けあたかも手足の仲（情同手足）」という表現は、兄弟のように親しいという意味になります。また「兄弟呼ばわりする（称兄道弟）」も仲の良さを意味します。そして次に親しいのは「郷親」「老郷」（同郷の人）です。[17] この「母子」「兄弟」「同郷」の関係は「食」によって結ばれています。「母子」は「食べる」と「食べさせる」関係にあり、「兄弟」「同郷」は「共食」の関係なのです。「母」の字については、『説文解字』に「乳房に似ている（像乳子也）」とあります。「母」の外側は「女」の字が縮んだ形で、「母」の中の二つの点は乳首を表してい

ると考えられます。したがって、母と女の違いは乳首であり、乳が出るか出ないか、哺乳能力があるか否かが重要だと思われます。哺乳能力の有無、その大小と豊饒という意味で「偉大なる母の偉大さ」という言い方が可能でしょう。まさに「食産」文化という視点から見れば、母の偉大さは乳房の大きさ、その豊穣さによるところのものと考えられるでしょう。[18]

（四）「寄せ鍋」の文化論的背景と服飾の場合

寄せ鍋が中国人に愛される理由を文化論的に考えると、「共食」関係を創ることができる、直接火を使うという点にあるのではないでしょうか。[19] 周知の通り、火の発明は人類の文明史上大変重要な出来事です。中国の場合、雲南元謀人が一七〇万年前から火を使用していたとされています。そして寄せ鍋の歴史も八千年前、約磁山、裴李崗文化時期に遡るといいます。実際、中国文化では、火の使用が可能か否か、熟食（加熱食）か生食かが、先進と後進、文明と野蛮を峻別する一つの目安とされてきました。『礼記・王制』では、東の野蛮人を夷、南の野蛮人を蛮と呼び、いずれの場合も「熟食をしない（不火食）」と記していますが、フランスの文化人類学者レヴィ・ストロースが提示した、「生／熟＝自然／文化」の公式とも共通します。[20] ここで見逃せないのは、「煮焼きして食べる（火食）」ことが、

火
huǒ

象形文字。甲骨文は炎の形をし、後に飛び散る火花が加わる。本義は炎。

図解漢字図16

単に「熟食」だけを意味するのではなく、「共食」つまり「皆で火を囲んで食べる（共火而食）」という意味になり、現代中国語の「伙食」（まかない、食事）の「火」の字に人偏が添えられるようになったということです。現代中国語では、「食事」を意味する言葉として、「伙食」のほかに「膳食」（食膳）もよく使われます。「伙食」が軍隊や企業・行政機関などにおいて集団でとる食事を指すのに対し、「膳食」は日常的食事のことをいいます。特に「伙食」の「伙」の字は、「仲間・連れ・パートナー」の意味である「伙伴」・「夥伴」にも使われます。「火を囲んで食べる」人たちが「伙伴」のもともとの意味であり、昔は直接「火伴」と書いたらしく、古代兵制にその起源があるとされています。古代兵制においては、五人で一列とし、二列で火を熾していました。つまり、一〇人で一つの火を取り囲んで煮焼きすることが、本来の「火伴」で、今の中国語でいうと「戦友」に当たります。平時では、同じ火を囲んで食事をするのは家族の場合が多いのですが、

図解漢字図17

異なる出自の人々が同じ目的で結束し集団をつくることを中国語では「結伙」といいます。ここから、「合伙」（連れ立つ、仲間同士で）、「入伙」（仲間に入る）、「搭伙」（仲間をつくる）、「散伙」（仲間が散る）、「団伙」（グループ）などのような概念が生成し、「火食」も次第に「伙食」に変わっていったと考えられます。通常、中国では、料理は台所で作り終えてからテーブルに運ばれますが、「火鍋」の場合には、調理と飲食が同時になされます。したがって昔ながらの親しみやすいムードをつくり出すのに、「火鍋」は最適の料理といえましょう。「火鍋」が中国人に好まれるのは、「みんなで同じ火を囲んで食べていた」時代への憧れからでもありましょう。実際「火鍋」を囲んで食事をするのは、家族や兄弟あるいは友達や仲間の場合が多く、単に「共食」するだけでなく、「吃出人情、吃出血縁」という言葉に示されるように、「食」に人情を見出し、「食」に血縁を創出するという意味もあります。こうしたところに中国人の深層心理を読み取ることもできるでしょう。よく中国人が、人を招いてご馳走したがるのは、ものを食べて腹を満たすというよりも、人情と血縁を新た

に創出したいからなのです。新たな共同体の生成、その安定と発展のための契機をつくることが「共食」の目的であり、中国人の深層心理と共同体意識があらわれていると思われます。その意味で「火鍋」は、料理の作り方というよりは、むしろ食べ方といった方がふさわしく、むしろ文化の一つのパターンといい得るのではないでしょうか。

まとめ

中国人は物事の善悪、あるいは有利不利にも関係なく、とにかく何でも食べる傾向にあり、中国文化は「汎食主義」の「食産」文化ということができるでしょう。

しかし、「民以食為天」（民は食を以て天と為す）という考え方は、生きるために食べるのか、食べるために生きるのか、という鶏と卵の論争にもなりかねない堂々巡りの議論でもあります。ただ残念なことに、大陸の人たちが数千年間、「食」でもって自己を認識し、同類か否かを見分けて世界を捉えてきたとしても、五千年の文明を誇る大陸文化が、存在論的には形而下的な段階に留まっているという事実があります。

孫隆基氏が中国人のことを、「いまだ心理的離乳（サイコロジカルウィーニング）のできていない民族」（「还没有断奶的民族」[21]）といったり、余秋雨氏が二千年以上にわたる儒教の一教独裁を嘆いて、中国人の思惟様式を、慣性の法則により一元的にしか物事が判断できない（中国人的思維慣性、就

是対任何問題的単一化判断和選択）[22]と書いているのも、そうした状況と決して無縁ではないと思われます。私は別に形而上学を標榜しているわけではありませんが、近代思想の父といわれるデカルト（一五九六～一六五〇年）が提唱した、「我思う、ゆえに我在り」をあらゆる真理の究極の基礎として定立する必要があると考えています。中国の現状は、人間の理性があらゆる存在者を基礎づける究極根拠であるとする主観性形而上学と程遠く、生の価値をひたすら「食」に求めるという状況は、どう考えても理想的な文化心理とはいえないでしょう。李波氏は中国の伝統料理の作り方（一〇種類）と、封建時代の一〇種類の極刑に類似性があることを指摘し、中国の「口腔文化」（食文化）に激しい批判を浴びせています。[23]清朝末まで続いた極刑の残忍さ、悲惨さは、よほどの勇気と覚悟がなければ読み続けていくのが困難なほどです。仮に「野蛮」と「活力」が同義語なら、「文明」はしばしば「頽廃」を意味しかねないでしょう。

第三章　「事死如事生」（生に事うるが如く死に事え）――中国葬儀文化の淵源

葬儀は上古時代の中国社会における大変重要な習俗で、孝行の文化でもありました。これは地域によって異なった様相を呈し、時代の移り変わりとともに絶えずその有様を変えてきています。周知のように、古代中国は同族支配の時代で、葬儀は、「事死如事生、事亡如事存、孝之至也」（生に事うるが如く死に事え、存に事うるが如く亡に事うるは、孝の至りなり）[24]というのが大原則でした。葬儀の習俗・制度にはきわめて複雑なしきたりがありますが、それらは封建という時代背景とその政治倫理の下で徐々に出来上がったもので、最初から現在のような形だったわけではありません。上古時代の葬儀はきわめてシンプルです。『易経』には、中国の上古時代よりはるか昔の葬儀形式について、「古之葬者、厚衣之以薪、葬之中野、不封不树、丧期无数」（昔は死者を葬る場合、薪を幾重にも屍体にかぶせて野原に埋葬するだけで、「封」（土の山）を造ることも、樹を植えて墓標とすることもせず、喪に服する期間にも定めがなかった）[25]とあります。一方、上古時代以前には考えられもしなかったプロセスが、現代の葬儀習俗ではあたりまえになっています。おもしろいことに、このことは葬儀の「葬」の字の構成とその由来を分析してみることで明らかになってきま

す。「葬」の字の小篆（秦篆）書体は、「艸」と「死」と「一」という三つの部首からなっており、「艸」は「叢（くさむら）」を、「死」は「屍体」を、そして「一」は死体を荒野に運ぶときに使う木の板の類を指すと考えられます。葬儀の最初の有様がリアルに伝わってくるような気がしてなりません。また、『説文解字』に「葬者蔵也」（「葬とは蔵（かく）すことなり」）と書いてあることからもわかるように、先に引用した『易教』の中の「古之葬者、厚衣之以薪、葬之中野、不封不樹、喪期无数」における「葬」の字は現代日本語における「埋葬」の意味、つまり屍体や遺骨を土中に葬るという意味ではなく、森や草むらの中に屍体を隠す＝埋葬すると理解した方が正しいのではないかと思います。

しかし、死体を柴木や草で包んで荒野に埋葬するというやり方は、鳥獣に死体をまるごとさらけ出すことにもなるので、引き裂かれたり食べられたりすることもよくあって、このような葬儀習俗はやがて改められるようになったのだと思います。さらに、改善されたもう一つの要因は、人々が霊魂（たましい）（魂魄）の概念を持つようになったからではないかと思います。「魂」の字は通常、人の精気を指し、人体から遊離して天に漂い、永劫不滅で、死後天に帰すると解釈されています。『説文解字・鬼部』には、「魂、陽気也。従鬼、雲声」とあり、死後の魂という意味の「鬼」の字を持っており、「云」（「雲」）は発音を表します。すなわち、人の死は肉体の死を意味し、魂は雲のように空を漂い永劫不滅であるので、死

体を保護しないで鳥獣に引き裂かれたり食べられたりするのを放置していると霊魂（たましい）が憤りを感じ、生きている人、特に親族に災いをもたらすと考えるようになった、それが葬儀文化の始まりだと思います（ちなみに「魂魄」の「魄」について『礼記・祭義』には「耳目之聡明為魄」〈耳目の聡明を魄と為す〉とあり、耳でよく聞き分け、目でよく見分ける能力を意味します）。また、仮に死が肉体の死だけを意味し、魂は永劫不滅であるとすれば、死者の親、子ども、兄弟などの親族も、遺体が鳥獣のほしいままにされるのを見るに堪えなかったにちがいありません。そこで親族は弓矢を持って遺体の周囲を守り、鳥獣を駆除するようになったと考えられます。つまり、これが「弔い」という新しいしきたりの始まりであると考えられるでしょう。「弔」の字の小篆は「人」の字と「弓」の字から成り立っており、人が弓を携えているという意味で、古代人が遺体を守っているリアルな形象（イメージ）が文字になったものです。また、『説文解字』（人部）には、「弔、問終也。古之葬者、厚衣之以薪。従人持弓、會歐禽」とあります。「問終」は「死者を見舞う」という意味だと考えられます。さらに、『呉越春秋』（後漢の趙曄撰）にも、「弩生于弓、弓生于弾、弾起于古之孝子。古者人民质朴、饥食鸟兽、渴饮雾露。死则裹以白茅、投于中野、孝子不忍见父母为禽兽所食、故作弾以守之、绝禽兽之害」とあります。すなわち、弩（いしゆみ・おおゆみ）は弓から生じ、弓は弾弓から生じ、弾弓は親孝行な子に由来する。古えの世界では人民の生活は質

素で、飢えたときは鳥獣を食し、渇いたときは露を飲み、死ねば茅(かや)に包み野原に放置していたが、親孝行な子は両親が禽獣に食べられるのを見かねて、弾弓を作って遺体を守り、鳥獣の被害を絶ったというわけです。弓と弔いの関係は否定できない事実です。しかし、親孝行な子が弓で鳥獣を駆除し遺体を守ることはできても、遺体が風雨や日光にさらされることは避けることができません。そこで遺体を土中に埋葬するといった葬儀が新たに考案され、次第に現在われわれが見ているような古墳の世界が出来上がったと見てよいでしょう。現在私たちは遺体が埋葬される場所を「墳墓」といいますが、上古時代の中国において「墳」と「墓」は同じではありませんでした。西周時代の中原地区（現在の河南・山東・山西省の大部分と河北・陝西省の一部）では、まず地面に穴を掘り遺体を安置してから、再び穴を埋め地面を平らに整えるという造り方をしており、土を盛り上げて土の山を造るといったやり方はしませんでした。これがつまり「墳墓」の「墓」であり、『礼記・檀弓』にある「墓而不墳」（墓して墳せず）というのは、このような造り方のことを指しているわけです。しかし、同じ時代でも長江下流の東南地区においては、地面に水がたまりやすく湿気が多いため、墓の造り方が中原地区とはまったく異なっていました。乾燥地帯の中原地区のように地面に穴を掘るのをやめて、川底などから拾ってきた玉石などを敷き詰めたり積み上げたりして墓室の土台を造り、その上に棺桶を置き、それから土や砂で埋め、そ

の上にさらに土を盛り上げ土の山（土饅頭）を造ったわけです。これがいわゆる「墳」のもともとの造り方なのです。

春秋時代になると、中原地区では、地面に穴を掘るといった伝統的な墓の造り方を基に、南の長江下流の、うず高く土の山を盛り上げるといった習俗が取り入れられ、名実ともに穴もあれば土の山もあるといった「墳墓」が造られるようになったわけです。

ちなみにこの二つの文字にはいずれも「土」の部首が含まれているので、すぐに土との関連がわかりますが、「墳」の字のつくり「賁」は「fen」という発音を表すと同時に、「満ち満ちている」とか「膨らむ」という意味もあるので、「賁」のつくりを含んでいる文字、たとえば「憤」「僨」（中国語では奮い立たせるの意）、「轒」（車の傘骨）などは、いずれも何かでいっぱいになっている状態あるいは隆起状態を指していることがわかります。また、「墓」の「莫」という字も表音（mu）と表意の機能を兼ねており、もともとは「暮色蒼然」というときの「暮」の字で、「日暮れ」とか「日没」を意味していたようですが、ここでは人の末日を表していると解釈することもできます。

そもそも社会風習というのは往々にして必要から生まれ、それからだんだんと礼儀作法になっていくものです。必要は礼儀作法の母、礼儀作法は必要の形式的な延長だということができるでしょう。以上見てきた葬儀文化がまさにそうです。人が弓矢を携え遺体を守っ

たのは、鳥獣を駆除する必要からです。土葬文化に移り変わった後は、その必要もなくなり廃れてもおかしくなかったのですが、その習俗は今日まで延々と続いております。その形式がとりもなおさず「帯孝守喪」（喪服または喪章をつけて喪に服する）の習慣で、中国人の多くは、現在も喪に服する期間中は髪に黒のリボンをつけたり、腕に黒の腕章を巻いたりして死者を弔っているわけです。中国語で「守喪」のことを「服喪」ともいいますが、喪に服するということは、人の死後、その近親者が一定の期間、外出や社交的な行動を避けて身を慎むということです。『礼記』では、親疎によってその期間が、三カ月、五カ月、九カ月、一年、三年と細かく規定されており、服装その他についても約束事が数多くあります。

主要参考文献

顧建平著『漢字図解字典』（中国出版集団東方出版中心、二〇〇八年一〇月）

臧瀚之等編著『上下五千年』（上下、京華出版社、二〇〇八年九月）

ＣＣＴＶ国宝档案シリーズ番組編著『国宝档案』（中国民主法制出版社、二〇〇九年一〇月）

馬衡著『中国金石学概論』（時代文芸出版社、二〇〇九年一〇月）
易中天著『読城記』（上海文芸出版社、一九九七年一〇月）
――『閑話中国人』（上海文芸出版社、二〇〇〇年一月）
――『品三国』上（上海文芸出版社、二〇〇六年七月）
――『品三国』下（上海文芸出版社、二〇〇七年三月）
王立群著『読史記之秦始皇』（広西師範大学出版社、二〇〇八年一一月）
――『読史記之漢武帝』（長江文芸出版社、二〇〇七年四月）
銭文忠著『解読〈三字経〉』上（中国民主法制出版社、二〇〇九年二月）
――『解読〈三字経〉』下（中国民主法制出版社、二〇〇九年四月）
余秋雨著『問学・余秋雨・与北大学生談中国文化』（陝西師範大学出版社、二〇〇九年一一月）
李波著『口腔里的中国文化』（東方出版社、二〇〇七年二月）
梁毅編『漢字五千年』（新星出版社、二〇〇九年四月）

注

（1）規模の小さい国が多数存在したらしく、復旦大学の銭文忠氏（『解読〈三字経〉』下、中国民主法制出版社、二〇〇九年四月）によると、西周時代の初め、中原地帯だけでも三千余りあった

といわれる。しかし、春秋時代には一八〇〇余りに減少し、さらに春秋時代の終わりになると二〇足らずになり、戦国時代には戦国七雄といわれるように、数えるほどしか残っていなかった。

（2）「邦国」の「邦」は国を意味し、「都」は都市、「鄉」は村落、そして「郊」は郊外の意味を持つ。「鄙」は「辺鄙」の「鄙」なので「城市」から遠く離れたコミュニティーを表す。コミュニティーとコミュニティーの間を「鄰」と呼び、これも部首はおおざとである（日本語の「隣」はこざと偏になっている）。また「村落」の「村」の異字体は「邨」で、やはり部首はおおざとである。

（3）アモイ大学の易中天氏は、『史記・五帝本紀』にある「一年而所居成聚、二年成邑、三年成都」（一年間住めば聚となり、二年経てば邑となり、三年で都となる）を紹介し、「聚、邑、都」の順で、「城市」は低から高へ、小から大へと時代とともに徐々に発展してきたことを指摘している（『読城記』上海文芸出版社、一九九七年一〇月）。

（4）河南大学の王立群氏は『読史記之漢武帝』（長江文芸出版社、二〇〇七年四月）の中で、漢王朝の開祖劉邦の曾孫に当たる劉勝（漢武帝の兄）という人物の名前を挙げ、数十人の女性との間に息子だけでも一二〇人以上儲けたことを指摘している。

（5）邦国時代の国々は、それぞれ自由に租税を徴収できる独立した財政権と、軍隊およびその指揮権を持っていたので、独立した政権運営ができた。そのほか外交権も有し、自由に外交活動を行い、通商権や交戦権も行使でき、独自に同盟や講和を結ぶことができたので、諸侯国は独立主権国といえる。

（6）『左伝』の中には、「天子之城方九里、諸侯礼為降殺、則知公七里、候伯五里、子男三里」（天

子の城は四方九里にて、諸侯は礼儀上それより範囲を縮小せねばならず、公爵は七里、候爵は五里、子男爵は三里であることを知るべし）という記述がある。同じ「都邑」の場合でも、諸侯の封地しか「都」（国都）と呼べず、大夫の「封地」は「邑」としか呼べなかった。そして「都」の中でも天子の「城」は「京」と呼んだ。『説文解字』の解釈では、「京、人所為絶高丘也」（京とは、人為の為したる最高の丘也）とあり、「京」とは人為的に構築された一番高い丘を意味し、天子の「城」は天下無双の高いものでなければならなかった。「国民政府」が都を南京に定めた時、北京を「北平」に改めたことはよく知られているが、「京」とは唯一無二のものでなければならず、現代中国語においても、「都」は「都会」「都市」のように大都会という意味で使われ、普通は古い「京城」を指し王朝の霊屋の所在地である場合が多い。周代の制度によると、「都」は「京」の三分の一を超えてはいけなかったようである。

（7）日本語では取引のことを「売り買い」と書いて「売買」という。中国語では「買い売り」と書き、「買売」と日本語と順番が逆である。先に物を売るところから取引を始める日本人の方がやはりビジネスがうまいといわなければなるまい。

（8）おそらく「城邑」に付随して誕生したと考えられる「市」は、最初、間に合わせの場所で開かれ、常設の市場ではなかった。また、三日に一度、五日に一度、一〇日に一度といった間隔で「市」が開かれ、市が立つ日に人々が集まってきたはずである。現在も中国（農村）では、「赶集」「赶場」という言葉が日常的に使われ、特に田舎では、週に一度ぐらいの間隔で「市」が開かれるところが多い。「赶、趕」の字は、「追う、追いかける。急ぐ」、「赶集」「赶場」は「集まりに

急ぐ」「（決まった）場所に急ぐ」という意味である。毎日いつでも開かれているわけではないので、それこそ急がなければ間に合わない。

（9）紀元前二二一年、秦の始皇帝は中国史上初めて統一国家を造ったが、一五年ぐらいで滅んでしまう。それに取ってかわったのが、二番目の統一王朝漢である。漢王朝は歴史の舞台に登場してから四二〇年余り続くが、中国の歴史ではその前半を西漢または前漢、その後半を東漢または後漢という。現在、中国人のほとんどは漢族で、漢族とか漢語という言葉はこの漢王朝からきている。

（10）易中天氏の『閑話中国人』（上海文芸出版社、二〇〇〇年一月）によると、上古時代、皿の数は（商周秦漢の時代、皿を豆と呼ぶ）、天子は二六豆、公爵は一六豆、侯爵は一二豆、上大夫は八豆、下大夫は六豆と決められており、これを「均」といっていた。よって、現在われわれが考えているような平均と理解したら大変な間違いである。

（11）これまでに見つかった鼎の中で一番大きなものは、河南省の殷代（紀元前一四世紀～同一一世紀）の遺跡である殷墟から出土したもの（司母戊方鼎）である。大きさは、高さ一三三センチ、長さ一一〇センチ、広さ七八センチ、重さ八三二・八四キロである。羊や牛の肉を十分煮込んでから皆で食べるわけだが、その典型的な食べ方の一つが「鐘鳴鼎食」である。鐘の音がいっせいに鳴り響く中でパーティの司会者である宰相が、「礼」に基づいてあるいは国王の指示通りに、匕首の匕（食事道具、匙）で鼎から肉の各部位を取り出し、爵位の高いものから順に、一人一人の席の前に置かれた俎の上（俎上）に分配し、各自短刀のようなもので切って食べるのである。

そのため、宰相の役割は誰よりも大切だったと推測できる。

(12) 「鼎の軽重を問う」という故事の由来。紀元前六〇六年、楚の軍が陸渾の軍を討伐して洛水に至り、周の王室の勢力圏内で軍事訓練をし武力を誇り威勢を示していた。周の王室はおもしろくないと思いながらも時勢が時勢だけにやむなく王孫満という使いを送って楚の軍隊を労ったという。その時、楚の荘王があの九鼎の位置と大小・軽重を問うたという『春秋左伝』に出てくる話である。

(13) 「佯装」の意味は「装羊」つまり羊を装うことで、現代中国語における「装洋」「装様」「装様蒜」などの言葉は、いずれも羊を装うことに由来する。

(14) 「多」は肉片が二つ重なった形の字で、もともとは肉が「多々益々弁ず」という意味であった。

(15) 今でも巷では多くの地方で、乳房のことを「媽媽」(母)と呼び、「乳を飲む」ことを「吃媽媽」(母を食べる)という。飲む立場からすれば、母イコール乳汁、つまり乳腺から分泌される乳白色の液体そのものなので、とにかく乳を飲ませてくれるもの、養い育ててくれるものは、血縁でなくても母といえるわけである。たとえば、「乳母(めのと)」、「養母」(義理の母)はまったく血の繋がりがなく、「母校」、「母親河(母なる川)」、「母語」といった言葉も広い意味で養育と関係がある。

(16) 中国人は、交際を円滑に進めていくために、赤の他人でも血縁関係に見立てるという工夫をこらす。日頃から「父母官」「子弟兵」「父老郷親」「兄弟単位」などという表現を好んで使いたがる。

(17) 「老郷見老郷、両眼涙汪汪」(同郷人が会うとすぐ両目に涙をいっぱい浮かべる)という表現

からもわかるように、古里を離れ余所で暮らす人にとって頼りになる人、援助の手を差し伸べてくれる人は、同郷の人の場合が多い。今でも中国各地には、民間組織として同郷会または同郷会館が非常に多く存在する。法治観念の徹底していない中国社会には、不文律として現在も、同郷の人のための軽犯罪または過ちは大目に見てもらえるという、暗黙の了解が成り立つ場合が非常に多い。

(18) 同じ母の乳を飲んで育った人が兄弟姉妹（共食）であるが、広義に解釈すると物質的な食糧と精神的な食糧を共有する人も中国語では「師兄弟」（師を同じくする兄弟）となる。ここに、文化学の一つの原理が隠されていることに気が付く。つまり、同じものを食べる人々は血縁関係にあると見なすことができるということである。食べ物が生命の源で最初の食べ物が乳汁であったが、乳汁が生命の拠り所である以上、食べ物も当然生命の拠り所であるにちがいない。同じ母の乳を飲んだ人が兄弟姉妹であるならば、同じ食べ物を共食した人を同じように呼ぶのも当然のことであろう。共食関係として同郷人を挙げることができるが、中国語における「同郷」または「郷親」は、まさに同じ河の水あるいは同じ井戸の水を飲んで育った人で、同じ「母親河（母なる河）」の水を飲んで親しく育ってきているわけである。水は生命の源で、ふるさとも生命の誕生したところであるから、「同郷」の人は二重の意味で生命を共有しているわけである。

(19) 寄せ鍋が好まれるのは、熱々の鍋を囲む雰囲気から親しみを感じる、みんなで丸いテーブルを囲むことから団欒が生まれる、だし汁で食材を煮炊きすることから「以柔克剛」（柔能く剛を制す）を表す、肉料理、精進料理といったことにこだわらず、どのような食材でも一緒に煮込む

ので中和が取れている、などの理由からである。

(20) 現代中国語の中にも、たとえば「生拉硬拽」「生吞活剥」「爛熟於心」「熱門塾路」「生疎」「生硬」「生僻」などのように、プラス評価のときは「熟」の字を、マイナス評価のときは「生」の字を使う言葉がたくさんある。

(21) 『中国文化的深層結構』広西師範大学出版社、二〇〇四年五月。

(22) 『問学・余秋雨・与北大学生談中国文化』陝西師範大学出版社、二〇〇九年一一月。

(23) 『口腔里的中国文化』東方出版社、二〇〇七年二月。

(24) 『中庸』第六章「子曰わく、〈武王・周公は、其れ達孝なるかな。夫れ孝とは、善く人の志を継ぎ、善く人の事を述ぶる者なり〉と」からの引用。原文：春秋脩其祖廟、陳其宗器、設其裳衣、薦其時食、宗廟之礼、所以序昭穆也、序爵、所以弁貴賤也、序事、所以弁賢也、旅酬、下為上、所以逮賤也、燕毛、所以序歯也、践其位、行其礼、奏其楽、敬其所尊、愛其所親、事死如事生、事亡如事存、孝之至也。

現代語訳：春と秋にはその祖先の霊廟をととのえて伝承の祭器をならべ、祖先の衣服を神位にひろげて季節の食べ物をおすすめする。宗家の霊廟の祭礼は、昭と穆との序列をはっきりさせ〔て、世代の別を明確にす〕るためであり、参列者の爵位に従って席順を定めるのは、身分の高下をはっきり区別するためであり、祭事の分掌を整理して秩序づけるのは、有能な人材をはっきり区別するためであり、祭礼の終りの旅酬の礼になると下位の者から順に上位者のために酒をすすめるのは、身分の低い者にも祭事に当たらせるためであり、祭が終ったあとの宴会では毛髪の

色で席順を定めることになるのは、年齢の序列（長幼の序）をはっきりさせるためである。先祖のおられた場所におり、先祖の行なわれた礼を行ない、先祖の奏でた音楽を奏で、先祖の尊んだ人びとを尊敬し、先祖の親しんだ人びとを親愛して、今は亡き死者に仕えること、まるで生きてそこにいる人に仕えるようにする。これが孝行の極致である（『大学・中庸』金谷治訳注、岩波書店、一九九八年四月一六日第一刷発行、一七九～一八二頁）。

（25）『易経・繫辞下伝』からの引用。原文：上古穴居而野處。後世聖人易之以宮室、上棟下宇、以待風雨、蓋取諸大壯。古之葬者、厚衣之以薪、葬之中野、不封不樹、喪期无數。後世聖人易之以棺椁、蓋取諸大過。上古結縄而治。後世聖人易之以書契、百官以治、萬民以察、蓋取諸夬。

現代語訳：上古の人々は穴に住み野宿をして生活していたが、後世の聖人がそのかわりに家屋をつくり、棟を上方にしつらえ宇を下に垂らして風雨に備えるようにしたのは、おそらく大壯の卦䷡（乾下震上、すなわち風雨が上に震動しても棟宇が下に堅固さを保つ象）から思いついたことであろう。昔は死者を葬る場合、薪を幾重にも屍体にかぶせて野原に埋葬するだけで、封（土饅頭を）つくることも、樹を植えて墓標とすることもせず、喪に服する期間にも定めがなかった。後世の聖人がこれにかえて棺椁（棺は内棺、椁は外棺）を用いるようにしたのは、おそらく大過の卦䷛（巽下兌上、外の二陰が土、内の四陽は棺材、土中に棺材を埋める象）から思いついたことであろう。上古は縄を結んでその結び目の大小を物事の大小の目じるしにするだけで無事に治まった。後世の聖人がそのかわりに書契（文字や割り符）を用い、これによって役人たちは事務を治め人民たちも物事を察知するようになったが、これはおそらく夬の卦䷪（乾下兌上、夬

は決断の意、また一陰が五陽の上に在るのは割り符の象）から思いついたことであろう（『易経』下、高田真治・後藤基巳訳、岩波書店、一九九六年一〇月四日、第三八刷発行、二五五～二六〇頁）。

発表を終えて

憧れと期待とわずかの不安に胸をときめかしながら日文研に来たのは半年前のことになる。山の中のこぢんまりとした建物、緑豊かな静かな環境ときれいな空気、そしてマイペースでゆとりをもってオリジナルな研究を続ける博学多識の学者陣。毎日ゲストハウスと研究棟を行き来しながら、素晴らしい研究環境に恵まれた幸せを噛みしめた6カ月であった。爛漫と咲き乱れる久留米ツツジと、五月ツツジの凛とした微笑み、そしてエンジュの花のほのかな香りは日文研の原風景としていつまでも記憶に刻まれるだろう。特に忘れられないのは大阪に飲みに出かけた晩のことである。「栄華亭」という小さな炭火焼きの店の名に、ふと摂関政治の全盛期に栄華を極めた藤原道長の、「この世をば　わが世とぞ思ふ望月(もちづき)の　かけたることも　なしと思へば」という歌を思い出し、ゆえしれぬ感慨にひたりながら、深夜日文研ハウスの門前にたどり着いた瞬間、キューンと叫んで目の前を駆け抜けていく日本鹿の群れに出くわし、度肝を抜かれた。さらに、もう一つの驚きは、本発表を終えた後、当日の参加者によるアンケート集計で、発表者についての質問に、「とてもよかった」「よかった」の答えが91％（最高95％）を超えていたこと。これは当然ながら、深夜に突然鹿に出くわした驚きとは性質を異にするものであり、ほっと胸をなでおろすことができた。

最後になったが、発表に際し荒木浩先生には何度も貴重なご指導を賜り、また佐野真由子女史や研究協力課の方々にも本当にお世話になった。心から謝意を表したい。そして京都市民の皆さん、幸せなひとときの共感と感動をありがとう！